能『井筒』「その時だにも昔男といはれし身」の典拠について

On Source of the Interpretation of "Mukashiotoko" in Noh "Izutsu"

角田達朗
Tatsuo Sumida

『井筒』前場のシテ詞に「その業平はその時だにも、昔男といはれし身」[1]とある。これは在原業平が生前から「昔男」と呼ばれていたことを意味するものと解される。今日的見地からは奇異に見える言明であるが、むしろそうであるからこそ、このように言い得る何らかの根拠があったものと推測できる。本稿はこれを『伊勢物語』古注釈との関係から考察するものである。

＊

まず、このシテ詞がこれまでどのように解釈されてきたかを列挙し、[2]内容を吟味しておく。なお、本稿の引用文中の傍線はすべて筆者が付したものである。

①『謡曲大観 第五巻』（佐成謙太郎著／明治書院 一九三一年四月二十日）三四〇四頁

昔男：伊勢物語は毎段「昔男ありけり」といふ句で始まつて居り、その主人公はすべて業平であると解されてゐたので、業平をその当時から昔男と呼んだやうにいひ做したのである。

〈訳〉業平は在世当時でさへ昔男といはれた人でございますのに訳文で「その時」が業平の生前であると明示している。また、「やうにいひ做した」とは、シテが業平は生前から「昔男」と呼ばれていたと語るのを、第一義的にはシテの機知により、本質的には作者・世阿弥の独創に係ると解するものであろう。

②野上豊一郎編『解註 謡曲全集 巻二』（中央公論社 一九三五年七月十五日／改訂再版一九四九年十二月十日）二五二頁

昔男：業平のことをさう云ふやうになつたのは、伊勢物語の段章の冒頭に「昔男ありけり」とよく書いてあり、その物語はす

べて業平の事だと解されて、さう呼ばれた。業平は生時に於いても昔男と呼ばれたと此処では解してゐる。

「その時」は業平の生前であると明示している。「此処では解してゐる」とは曖昧ではあるが、①の見解とほぼ同じ趣旨と見てよかろう。なお、「段章の冒頭に～よく書いてあり」という表現は、他書の「毎段」「各段」よりも正確である。

③日本古典文学大系『謡曲集　上』（横道萬里雄、表章校注／岩波書店　一九六〇年十二月一日）二七六頁

その時だにも：生きていた当時ですら。

昔男：『伊勢物語』の各段が「昔、男」で始まることから後世につけられた業平の異称。

「その時」を業平の生前であると明示するのは①②に同じ。しかし、「業平は生前から昔男と言われた」とされる根拠は不問に付されている。世阿弥の独創と断ずる根拠もないゆえの消極的対処であろう。

④日本古典文学全集『謡曲集　一』（小山弘志、佐藤喜久雄、佐藤健一郎校注・訳／小学館　一九七三年五月一日）二七四頁

昔男：『伊勢物語』の各段が「昔男ありけり」という句で始まり、その主人公は業平であると解されていたので、業平を「昔男」と呼んでいたように言いなしたもの。

〈訳〉その業平はその当時でさえも、昔男といわれた人

おおむね①の引き写しであると思われるが、「その時」がいつであるかを明示していない。

⑤増田正造・小林責・羽田昶『能　本説と展開』（おうふう　一九七七年三月二十日）一七頁

昔男：伊勢物語の各段は「昔、男ありけり」の句で始まり、その主人公は業平であるとされていたことによる。

「その時」がいつであるかを明示せず、「その時だにも、昔男といはれし身」の根拠も不問に付されている。

⑥新潮日本古典集成『謡曲集　上』（伊藤正義校注／新潮社　一九八三年三月五日）一〇五頁

昔男：〈生きていた当時でさえ「昔男」と言われた方で〉。『伊勢物語』各段冒頭の「昔、男…」に基づいて、「昔男とは在原の中将業平」（『和歌知顕集』）とするのが中世の理解。

「その時」が業平の生前であると明示している。「業平は生前から昔男と言われた」とされる根拠は不問に付されている。この二点は③と同じであるが、『和歌知顕集』を引用している所が目を引く。

⑦完訳日本の古典『謡曲集一　三道』（小山弘志、佐藤喜久雄、佐藤健一郎、表章校注・訳／小学館　一九八九年四月一日）一三四頁・

三四六頁

昔男：『伊勢物語』の各段は「むかし、男ありけり」という句で始る。また『伊勢物語』の主人公は業平であると解されたいたので、「昔男」はすなわち業平ということになる。

〈訳〉その業平はその当時でさえも、昔男といわれた人

おおむね④からの転載と思われるが、世阿弥の独創のように言う記述が削られている。

⑧新編日本古典文学全集『謡曲集 1』（小山弘志、佐藤健一郎校注・訳／小学館 一九九七年四月一日）二八九頁

昔男：『伊勢物語』の各段は「むかし、男ありけり」という句で始まる。また、『伊勢物語』の主人公は業平であり、それ故「昔男」はすなわち業平であると理解されていた。参考「昔男とは、在原の中将業平」（島原文庫本和歌知顕集中）。

〈訳〉その業平はその当時でさえも、昔男といわれた人

おおむね⑥を踏襲しているが、「その時」がいつであるかを明示していない。

⑨新日本古典文学大系『謡曲百番』（西野春雄校注／岩波書店 一九九八年三月二十八日）四六一頁

その時だにも、昔男といはれし身の：伊勢物語各段冒頭の「昔、男ありけり」に基づき、「昔男とは在原の中将業平」（和歌知顕集）と理解されていた。

おおむね⑥を踏襲しているが、「その時」には全く触れていない。

以上のように、九点中、「その時」を業平の生前であると明示するものは①②③⑥の四点に止まるが、他は解釈を明示しないものであり、異説があるのではない。解釈を示さないものは、当該シテ詞の言明が奇異に過ぎて説明困難であると判断したのであろう。しかし、当該シテ詞は直前のワキ詞「げにげに業平のおんことは世に名を留めし人さりながら、今は遥かに遠き世の、昔語りの跡なるを」を受けてのものであるから、「その時」は「今は遥かに遠き世」となった「業平のおんこと」の当時をさすはずである。あるいは、「その時」を、業平のことが「昔語り」となった時点と解することもできるかもしれない。しかし、「今は遥かに遠き世の、昔語りの跡なるを」と、「昔語り」が「今」の事を語る中に置かれていることを考えると、文脈上強引な解釈と言うほかない。したがって、「その時」を業平が生きていた当時と解することには、十分な妥当性が認められる。

「業平は生前から昔男と言われた」とされる根拠については、世阿弥の独創であるかのように言うものが①②④と三点あり、他の六点は不問に付している。これを不問に付し、かつ「その時」の解釈も記さな

いものも⑤⑦⑧⑨と四点にのぼる。

『伊勢物語』諸段冒頭の「昔、男〜」が「昔男」という名詞とされ、かつ業平を指すと解されることは、全ての注解で指摘されているが、言うまでもなく、これは「業平が生前から昔男と言われた」ということのうち、「業平が昔男と言われた」ということにのみ対応するものであり、「生前から言われた」とされることの根拠にはなり得ない。それでも強いて説明しようとすれば、世阿弥の独創であるかのように言うほかないのであり、それと断定するのも困難であるからと慎重を期すれば、「その時」の解釈まで回避することになるのである。

＊

上掲の注解のうち、⑧のみ「島原文庫本」と明記しているが、⑧⑨の引用する『和歌知顕集』も島原文庫本もしくはそれと同系統の本文である。「昔男は在原中将業平」という文は島原文庫本の系統にのみ存在しており、宮内庁書陵部本の系統では確認できない。具体的に示そう。

片桐洋一『伊勢物語の研究〔資料篇〕』(3)（明治書院　一九六九年一月三十日）所収の島原文庫本の巻中・一（二一八頁）に次のようにある。

とふ、むかしおとこ、うゐかぶりして［中略］そのおとこしのぶずりのきぬをなんきたりける、といへり。大かたはじめよりおはりまで、心えぬことゞもなり。むかしおとことは、たれ人ぞ。うゐかぶりとは、なに事ぞや。

こたふ、むかしおとことは、在原中将業平。うゐとは、はじめたることをいふなり。かぶりとは、つかさなることをいふなり。されば、なりひらのはじめてつかさたまはりたること也。

これと同系統の続群書類従本『伊勢物語知顕抄』中では傍線部が「むかしおとことはありはらのちうしやうなりひら」(4)と全文ひらがなであったり、同じく同系統の鉄心斎文庫本『伊勢物語知顕集』では「むかしおとことは、在原中将なりひらなり」(5)と「なり」が付くなど、小異はあるが大同である。

一方、宮内庁書陵部本の巻第二・一の該当箇所（片桐〔資料篇〕一二五頁）は次のようになっている。

鳥（トフ）、むかしおとこ、うゐかぶりして、といへり。このおとこはたれぞ。うゐかぶりとはなにを申にか。うけ給はるべし。

風（コタフ）、この男は業平也。うゐかぶりとは、はしめてつかさ給はるをいふなり。

同系統の歓喜光寺本『和歌知顕集』では「むかしおとこ」を「昔男」と漢字で記す以外全く同じである。(6)

⑥⑧⑨が島原文庫本系の『和歌知顕集』を引用するのは、専ら「む

かしおとことは、在原中将業平」という簡明な記述ゆえと思われるが、簡明であることと例証として妥当であることとは元来無関係である。片桐洋一『伊勢物語の研究〔研究篇〕』（明治書院　一九六八年二月二十日）によれば、書陵部本系は「既に鎌倉時代に成立していたことは確実」であるが、「一方、これに対する続群書類従本系には、古い写本が残っておらず、いずれも江戸時代の写しである。［中略］島原文庫本は、続類従本よりも僅かに善本かと思われるが、やはり同じ誤り、同じ脱落を有していて、全くの同系統たること疑いもなく、共に信ずるに足る本とは言えないのである。」（四七五～四七六頁）

＊

そもそも『井筒』の人物設定に関する例証としては、島原文庫本に限らず『和歌知顕集』そのものが適当ではない。

片桐〔研究篇〕四九三～四九四頁に『和歌知顕集』の特徴を以下のように述べている。

注目すべきは、在原業平を伊勢物語全章段の主人公とは必ずしも見ていない、つまり、伊勢物語は在原業平の一代記には違いないが、他の人物の物語も少しだけ加わっているという見方をとっているという事実である。たとえば、［中略］二三段の「ゐなかわたらいしける」男女の物語を業平に非ずして遠い昔の話だと言い、［中略］というように、その和歌の出典から言って明らかに在原業平の時代と相違するものについては、業平の事績にあらずとする割り切った態度をとっているのであるが、これはこの時代の注釈書の中では知顕集系統のみに見られる特殊な注釈態度なのである。

周知のように『井筒』は『伊勢物語』第二十三段を主たる題材とし、「むかし、ゐなかわたらひしける人の子ども」の男を業平、女を紀有常の娘とする。ところが、『和歌知顕集』の説はこの人物設定と全く相容れないのである。書陵部本『和歌知顕集』巻第三の該当部分（片桐〔資料篇〕一六〇頁）は次のようになっている。

鳥（トフ）、むかし、ゐ中わたらひしける人の子ども、井のもとにいでゝあそびける、といへり。これはたれ人ぞ。

風（コタフ）、この物語は業平の事にはあらず。はるかにふるきよのものがたりを、これにかきまじへたる也。この哥どもは、万葉集におほくよみ人しらずにていりたり。これをしらざる人は、まよひて業平の事とて、やう〳〵の儀を申とかや。おかしくこそ待れ。(7)

このように、第二十三段を業平の事とする説を無知によるものと断じ「おかしくこそ待れ」と嘲ってさえいる。(8) しかも、片桐氏によれば、『和歌知顕集』が各段の主人公をおおむね業平であるとしながらも一

部例外を認めていること自体、当時としては「特殊な注釈態度」だった。『和歌知顕集』は『井筒』の人物設定の根拠を説明するのにふさわしくないのみならず、中世の一般的な「昔男」解釈を示すのにも必ずしも適当とは言えないのである。

＊

『伊勢物語』全段を「昔男」業平の事とする解釈に基づいて『井筒』が作られたことを示すためであれば、冷泉家流古注の説を例証に引くべきである。冷泉家流古注は、世阿弥の時代に『和歌知顕集』よりも更に盛んに用いられたと考えられ、[9] かつ、第二十三段を含む全段を「昔男」業平の事としていて、『井筒』の内容と符合する点が多く、『井筒』に直接影響を与えたことは疑う余地がないからである。[10]

片桐〔研究篇〕によれば、冷泉家流『伊勢物語』古注は「秘伝として師から弟子に伝えられて来たために、現存する物のすべてが師の講義用ノートか弟子の講義聴講ノートであって、定本という物が存在しない」（五三二頁）のであるが、以下の論述では、冷泉家流古注の集大成とされる書陵部本『伊勢物語抄』[1] を片桐〔資料篇〕から引用する。ただし、書陵部本『伊勢物語抄』は「書写態度必ずしも良好と言えず、誤写・誤脱、特に書本の字を解読し得ぬままに書写したと思われる字形が多く、活字化するのに難渋した次第である」（片桐〔資料篇〕解題）

とのことであるから、これと共通の祖本を持つと見られる広島大学本『千金莫伝』[12] によって校異を付記することにする。（表記上の微差に過ぎないもの、および『千金莫伝』の方が明らかに誤っているものは省略する。）

＊

冷泉家流古注では「昔男」はどのように解釈されるであろうか。書陵部本『伊勢物語抄』春・一の該当箇所は以下のようになっている。

業平下位下官にして后・斎宮の上位を犯し奉る事をかく故に、我名をかくして昔男といふなり。　（片桐〔資料篇〕二九三頁）

＊「宮」の下に「等」がある。「なり」が無い。

これによれば、「昔男」は業平の本名を隠し、皇后や斎宮との関係を秘しておくための仮称であり、したがって「昔」は業平の行状であることが露見しないように時代を偽ったものである。注目すべきは、傍線部で「業平」を「我名」と記していることである。言うまでもなく、これには『伊勢物語』を業平の自著とする前提がある。

業平自著説は、序文で『伊勢物語』諸本の成立事情等を説明する中に見て取れる（片桐〔資料篇〕二九〇～二九一頁）。まず、『伊勢物語』の本文の系統について、以下のように列挙される。

抑、此物語に七本の差別有。一には業平自筆の本。二には具平親

王の本。三には安倍の師安の本。四には賀茂の内侍の本。五には高二位の尼の本。六には伊勢中書の本。七には長能がかりの使の本也。

＊「物語」を「本」に作る。五つの「は」がいずれも無い。

この七本うち、伊勢中書の本は次のように説明される。

業平伊勢を妻としたりし時、伊勢物語の草案をして書たりしを、業平滅後に宇多院より召されければ、奉之。我事を書たる事のあまた有しを、かたはらいたがりて万葉の哥をぬきかへて十七段のかへ物とす。［中略］伊勢が本は家隆相伝流なり。

＊「伊勢」を「此」、「の」を「を」に作る。「を」が無い。「奉之。」を「是を奉るとて、」に作る。「す。」の下に「能々見るべし。」とある。

業平自筆の本は次のように説明される。

伊勢が中がきの本より後に業平此物語を作て、二男滋春に相伝す。定家相伝流なり。

要するに、『伊勢物語』は業平草案→伊勢中書→業平成稿というプロセスを経て完成したものであり、自流はその完成版による、と主張するのである。その一方で、家隆流すなわち『和歌知顕集』系注釈[13]を業平成稿を経ない未完成版に基づくものとして貶めるのであるが、それでも業平の草案に基づくことは認めている。

他の本はどうか言えば、高二位の尼の本は以下のようである。

彼尼は業平四代の孫民部卿これすみの娘也。是は家の本は焼失したりつるを後に暗（ソラ）に覚る所計（バカリ）をかき集たる間、哥も少く物語も少し。或本に云、高二位の尼は業平が自筆の本にすこし私の哥物語を入たり。

＊「りつ」「も」が無い。「は」の下に「業平四代の末、高階成章か娘なり。これも」とある。「すこし」を「少々」に作る。

二説を挙げているが、いずれにせよ業平自筆の本から派生したものとすることには変わりない。

長能の狩使の本[14]については次のように記されている。

狩使の本は、すざく院の御時、長能・道斉を召て伊勢物語をせんぎして註髄脳廿余段の具書を作り大明神の御作の三巻の書を加てぬりごめに納給ふ。仍うゐ冠の本を塗籠の本と名付。此時長能・道斉、此本を世にひろめんが為にぬすみ出して、物語の段を作り躰をかへてかりの使の段を始書、狩使の本と名付て我家のたからとする也。

＊「せんぎ」を「勅選」、「斉」を「済」、「作り」を「乱」、「たから」を「集」に作る。

傍線部「ぬすみ出し」は朱雀天皇の意志に反して無断で書写したという意味であろう。藤原長能・源道済が詮議し不正に書写したという『伊勢物語』については、これより後の記載に

業平息男滋春に三君阿古根浦の口伝をくわへて伊勢物語を伝ふ。其より以来業平孫右大弁元清の時に至て、すざく院より業平ノ伊勢物語をめす。二巻の書を加へて御門に奉る。此時長能・道斉を召て、上に書所の具書を加て、又庫[15]の塗籠に被納之。

＊「男」が無い。「斉」は「済」、「書所」は「云處」に作る。

とあり、業平自筆の本であることがわかる。

これに続けて

此時に自筆の本御ひざうたる間、七本の差別出来たる。此は自筆の本御ひざうたるに依て、躰をかへて余の六巻の差別出来る也。其内に今の六本はうゐかうぶりの本たりといへども、自筆の本斗（バカリ）塗籠の本となれり。

＊「たる」の下に「の」がある。「躰」の上に「作者」とある。

とある。傍線部「余の六巻」は自筆の本以外の六本の意である。「巻」は「本」の誤記であろう。傍線部「其」は七種の本をさす。狩使の本以外の六本を「今の六本」と呼ぶのは、狩使の本は藤原定家が否定して以降行われなくなっていたからであろう。[16]

「自筆の本御ひざうある間」に「七本の差別」が生じたといっても、それ以前に伊勢中書と業平自筆の二本は成立している。上述のように、高二位の尼の本と長能の狩使の本は業平自筆の本から派生したものとされる。これらの四本を除く具平親王の本・安倍の師安の本・賀茂の内侍の本はすべて伊勢中書の本から派生したものということになる。要するに、『伊勢物語』の七本はいずれも業平草案→伊勢中書というプロセスを経ている、というわけである。

したがって、上記の「我名をかくして昔男といふなり」とは、業平がすでにその草案作成時に自分の行状を「昔男」の事として記していた、という意味であることがわかる。伊勢中書の本は業平の死後に伊勢が宇多院に献上したことによって世に出たとされるが、その際の改変は「万葉の哥をぬきかへて十七段のかへ物と」するのみであったと考えるのであろう。

＊

それでは、『和歌知顕集』は『伊勢物語』の成立をどのように説いているであろうか。書陵部本『和歌知顕集』巻第一「伊勢物語大事」の該当箇所（片桐〔資料篇〕一〇五～一〇七頁）は次のようになっている。

あめの下のいろごのみ在原中将業平朝臣、自ふるまひたりし事を

むねとして、ふるきものがたりをまじへてかきおきたりし物語也。

［中略］このものがたりは貞観七年に業平、長岡の寵居の時、かゝんとおもひはじめてかきたりしを、元慶三年に、きよがきおほせて、時の妻女伊勢にかたりていはく、我ことし心よはき年にあひあたりたり。老少さだめなければ、みまかる事あらば、かゝるものがたりあり。ほどへてのち、我したるものとしらせずして、人のかきたるやうにて、此伊勢ものがたりをとりいだして、世にあまねくひろめ給へ、おほやうはみ給しこと也、それを撰して、かきあつめたる也といひけれども、伊勢はまことゝもおもはず、あらましのやうに思ふほどに、あくる五月に業平うせにけり。かぎりなくなげきつゝ、なきあとのみわざなどいとなみつゝすぐるほどに、この人は七条の后につかうまつりければ、亭子の御門おぼしめして更衣になりにけり。日にそへて御めぐみふかゝりしほどに、世のいとまなくなりて、この事もおもひわすれぬ。ほどへてのち、さは、ふる人のいひをきし事のありしものを、あらましながら、まことにやと思ひて、ふるきはこの中をもとむるに、伊勢物語とかきたるものあり。とりてみれば、いまのかりの使といふものなり。さは、これなりけり、と思て、とりいださんとするに、おほくこの物語に、伊勢が事をいれたり。あやしく、男女のあひ思たる事をのみかきたりければ、時しもあれ、御門の御めぐみふかゝりければ、まばゆくびんあしくおぼえて、とりもいでざるを、又うちかへしあんずるに、さばかり大事して、かきあつめつゝいひをきたりし事、むなしからんも、ほいなかりぬべければ、そのなかに我事かきたるところをば、ぬきいだして、それにさにたるものがたりをかきかへくして、おのれが事をば、ひとつもいれずして、寛平三年に世にふるす。作者たれとなきやうにてとりいだしけるを、伊勢がふでにてかきてとりいだしたりければ、やがて伊勢がぶんとおぼしめして、御門、ことにも御もてなしありて、殿上にて御らんありしかば、世にこぞりてもてなして、おほくかきとりてけり。かゝるほどに、あくる四年五月にもなりにければ、伊勢、むかし人の事わすれはてざりしかば、十年あまりの御わざのはてせんとおもひて、しのびてさとにいでにけり。かの業平のかきおきたりしふるきほうぐどもとりあつめて、願文のかみにせんとしけるついでに、これかれをみれば、あるものゝそこに伊勢物語とかきたるものあり。あやしくてとりてみれば、いまのうゐかぶりのほんなり。ことにひきつくろひてかきたりければ、これぞ清書たりけるものよ、ありしは中がきのほんなり。むべこそもとみしにはかはりたりとはいひけれど、思ひあはせられて、これ

を又さきのごとくかきあらためて世にふるしつゝ、前のほんをば、かきたる人ごとにこひて、やきすてゝけれども、おのづからおしみていださゞりしほんのこりとどまりて、かりの使の本とはわかれたる也。されば家〻の本にさだまるもの也。かくおのれが事をぬきかへて、かきたりし（かば、これらも）伊勢がふでのうちにて、かのせりかはの行幸はいりたる也。これのみならず、業平以後の物語のあまたいりて侍るは、この伊勢がふでにて侍るなるべし。[17]

諸家の伝本を狩使の本と初冠の本に大別し、狩使の本は業平中書の本をその没後に伊勢が改変したもの、初冠の本は業平清書の本をその更に後に同じく伊勢が改変したものとしている。業平が『伊勢物語』を書いたとする点、伊勢による改変を経ているとする点[18]、および諸本を未定稿の系統と決定稿の系統に大別する点[19]は、冷泉家流古注と同じである。冷泉家流古注と『和歌知顕集』がいずれも『伊勢物語』を業平の自著としていることから、当時こうした見方が一般的だったことが確認できる。[20]

ただし、『和歌知顕集』は「昔男」という呼称を業平が自ら案出したとはしていない。業平が生前、伊勢に「ほどへてのち、我したるものとしらせずして、人のかきたるやうにて、此伊勢ものがたりをとりいだして、世にあまねくひろめ給へ」と指示したとし、業平の死後しばらくして伊勢がそれに従って狩使の本を「作者たれとなきやうにてとりいだし」、その後、初冠の本も同様に「かきあらため」たとしている。『伊勢物語』を別人の作のように粉飾した実行者は伊勢だというのであるから、伊勢が改変する時に初めて「昔男」という呼称を採用したと読めるのである。[21]

＊

以上の考察を踏まえて、くだんのシテ詞「その業平はその時だにも、昔男といはれし身」の解釈を考えると、以下のようになる。

まず、冷泉家流古注によって解釈してみよう。業平は『伊勢物語』を作り自分の事を「昔男」と書いた。伊勢が業平の生前にその草稿を中書した際にも「昔男」という呼称は改めていない。かつ、業平の子滋春や業平四代の孫民部卿惟純の娘が業平自筆の本を伝えていたというのであるから、業平は伊勢のみならず、一部の親近者には『伊勢物語』を渡していたことになる。この限られた読者たちは、それを業平の事と知りつつも、作者業平の意を汲んで、その主人公を「昔男」と呼び習わした、という想像がここに成立する。つまり、「その業平はその時だにも、昔男といはれし身」とは、業平が自分を「昔男」と書き、生前にも限られた読者からそう呼ばれていたことをさすと考えられる。

あるいは、「その時」を死後間もない時まで含むと考えれば、伊勢中書の本が宇多天皇に献上されて、『伊勢物語』が広く知られることになった辺りまで含むことになる。

次に、『和歌知顕集』によって解釈してみよう。『和歌知顕集』によると、『伊勢物語』が発見されるの自体、業平の死後である。しかも、「昔男」という呼称も、伊勢が『伊勢物語』を世に出す際に初めて用いたように読める。したがって、「その時」は業平の生前ではなく、死の少し後ということになる。全く通じないとは言えないものの、生きている期間を含まず、ただ死後だけを「その時」と言ったというのであると、いかにも苦しい解釈である。

こうしてみると、このシテ詞は、『井筒』全体がそうであるように、やはり冷泉家流古注を強く意識して書かれたものである。『和歌知顕集』の影響は明白には認めがたい。

＊

最後に、ワキ詞にも触れておこう。

シテが「故ある身かと問はせ給ふ、その業平はその時だにも、昔男といはれし身の、ましてや今は遠き世に、故も縁りもあるべからず」と、業平との関係を否定すると、ワキは「もつとも仰せはさることなれども」と一応は賛意を示す。この賛意は「今は遠き世に、故も縁りもあるべからず」に対するものと解されるが、[22]そうではない。ワキは「故も縁りもあるべからず」については疑いを残しているのであるから、賛意を示されるのはむしろ「その業平はその時だにも、昔男といはれし身」である。このことを理解するためには、このワキ僧の人物像を把握しておく必要がある。

『井筒』冒頭、ワキは「在原寺」と聞いてただちに「さてはこの在原寺は、いにしへ業平紀の有常の息女、夫婦住み給ひし石上なるべし、風吹けば沖つ白波竜田山と詠じけんも、この所にての事なるべし」と推察する。ワキが『伊勢物語』の世界を冷泉家流古注によって把握していることは間違いない。冷泉家流古注を知る者にとって「業平が生前から昔男と言われた」ということ自体は何ら不審なことではなかったのである。このことは当時の観客にも当てはまるであろう。

もちろん「業平はその時だにも、昔男といはれし身」ということと、「今は遠き世に、故も縁りもあるべからず」ということの間には飛躍がある。業平の生前の呼称がどのようであろうと、それはシテ自身との関係の有無に直結することではない。シテの言葉にワキが納得できないのも当然である。

ここで考えなければならないのは、作者世阿弥がこのような飛躍によって、どのような効果を狙ったかである。もちろん、それは現実感

の希薄な遊興性[23]などではない。強引な弁明によって、かえってシテが業平に「故も縁りもある」人であることを強く示唆する効果である。そして、論理展開の強引さだけでなく、「業平はその時だにも、昔男といはれし身」という言明自体もまた、それを示唆するものであったと考えられる。

既述のように、冷泉家流古注によれば、業平が自らを「昔男」と書いて本名を隠匿したのは、皇后や斎宮との関係を秘密にしておくためであったとされる。冷泉家流古注を知る観客であれば、シテの言明からこのことを想起することができるであろう。そして、このことを想起するなら、シテの言明が実は自らの名を隠匿し業平との関係を秘密にしておくためになされていると推測することも期待できる。

世阿弥が『井筒』の人物設定のみならず、劇展開の伏線にも冷泉家流古注を自在に活用していることが見て取れる。そして、世阿弥がこのような効果を計算し得たことから推測して、世阿弥の能の観客層に冷泉家流古注の説が浸透していたことも窺われるのである。

注

(1)　後出の岩波大系所収の下村識語本による。以下の詞章の引用も同じ。なお、このシテ詞は『謡曲大観』所収の観世流現行本、小学館全集所収の寛永卯月本、岩波新大系所収の寛永七年黒沢源太郎刊観世黒雪正本も同じ。新潮集成所収の光悦特製本は「いはれ」を「言はれ」に作る。笠間選書『元和卯月本謡曲百番（全）』（後藤淑他編／笠間書院　一九七七年九月二〇日）は「その業平はその時だにも」を「其業平は其時だにも」に作る。日本古典全書『謡曲集　上』（田中允校註／朝日新聞社　一九五七年一月二十五日）所収の車屋本は「あの」を「彼（かの）」に作り、同書頭注所引の田本は「その業平はその時だにも」を「其時だにも業平は」に作る。

(2)　注(1)所掲の諸書のうち、朝日全書『謡曲集　上』は当該シテ詞に校異を付すのみである。

(3)　同書の翻刻はすべて異体字・変体仮名を通行体に改め、句読点・濁点を補い、適宜振漢字を施している。本稿の引用に当たっては振漢字・返り点を省略した。また、読点および中黒については筆者の判断で変更した箇所もある。

(4)　『続群書類従　第十八輯上』（続群書類従刊行会　一九二四年八月二十五日／訂正三版一九五八年九月十五日）四六四頁

(5)　片桐洋一・山本登朗責任編集『伊勢物語古注釈大成』第二巻（笠間書院　二〇〇五年五月三十日）一一二頁

(6)　注(5)所掲の片桐・山本書二七頁

(7)　島原文庫本の該当部分は以下の通り。（片桐〔資料篇〕二四四頁）

とふ、むかし、いなかわたらひしける人のこども、［中略］おやのあはすれども、きかでなんありける、といへり。これはたれ人のことぞや。

こたふ、これはなりひらの事にはあらず。ふるき物がたり、まんえう

しうよりも、なをもあなたのことなり。このうた、万葉集には、よみ人しらずとおほくいりたるなり。

(8) 冷泉家流古注が第二十三段を業平の事とすることを考え合わせると、現存する冷泉家流古注諸本の原型が『和歌知顕集』よりも前に成立していた可能性も考えられよう。

(9) 片桐〔研究篇〕に以下のようにある。

冷泉家流古注が、知顕集などよりもむしろ、鎌倉時代勢語注釈を代表するものになってしまったために、他流、たとえば、

二条家にも、もとは古注をもてよみて聞する事あり。(闕疑抄)

というように、二条家やその末流の徒までが、この冷泉家流古注を用いるようになる(五三二頁)

思うに、鎌倉時代の伊勢物語注釈の中心はやはり冷泉家流の古注であったようである。知顕集は別として、それ以外の注釈や秘伝は多かれ少なかれ、冷泉流の注釈を意識し、それを土台にして、みずからの考えを述べたり、それに反撥して異なった主張をしていると言ってよかろう。この時代の諸流の伊勢物語の秘伝、加えて毘沙門堂本古今集注のごとき二条派末流の注釈にまで、冷泉家流伊勢物語古注の影響が甚だしいという現象は、かように考えることによってのみ納得出来るのである。(五九一～五九二頁)

(10) 伊藤正義「謡曲と『伊勢物語』の秘伝―『井筒』の場合を中心として―」(『金剛』六十四号 一九六五年五月/『中世文華論集 第一巻 能と謡の世界(上)』和泉書院 二〇一二年六月三十日)に「筒井筒の物語を〔中略〕「古注」では、まさしく、女は有常の娘とするのである。〔中略〕《井筒》が『伊勢物語』二十三段の他に、十七段と二十四段の歌をも引用しているのは、決して恣意ではないのであって、〔中略〕それは「古注」の説を踏まえる作者の『伊勢物語』享受の相を反映しているのである。」とある。なお、飯塚恵理人「伊勢物語古注釈と『井筒』―有常娘像の変貌」(『椙山女学園大学研究論集』第二十三号(第二部) 一九九二年/『夢幻能の方法と系譜』雄山閣 二〇〇二年三月二十五日)に「『井筒』は「冷泉抄」もしくはこれに内容的に近い注釈書を典拠としたと考えられる」とあるが、世阿弥が冷泉家流古注を受容した際、それが書籍になったものであったとは限らない。口伝を受けたということも考えられる。

(11) 片桐〔資料篇〕では当該文献は『冷泉家流伊勢物語抄』と題されているが、片桐洋一・山本登朗責任編集『伊勢物語古注釈大成』第一巻(笠間書院 二〇〇四年十月三十日)の片桐解題ではその呼称が『書陵部本伊勢物語抄』に改められている。同解題によれば、「冷泉家流伊勢物語注」は冷泉家流系統の伊勢物語注釈の総称であるが、しばしば誤って当該文献と同一視されるとのことであり、呼称変更はこうした混乱を避けるためと思われる。

(12) 妹尾好信・辻野正人・森下要治校・編『翻刻平安文学資料稿第三期第一巻 定家流伊勢物語千金莫伝』(広島平安文学研究会 一九九五年七月三十一日)による。片桐氏は「書陵部蔵冷泉家流伊勢物語抄は、広島大学蔵千金莫伝と同種の本に増補して一書をなした」(〔研究篇〕五三八頁)、「広島大学蔵の「千金莫伝」に別説を増補して、この書陵部本抄が出来上がった」(〔資料篇〕解題八七八頁)とするが、『千金莫

伝』森下解題はこれを批判して、「むしろ、両書を兄弟関係くらいに考えておくのが穏当ではなかろうか。ごく素朴に考えて、例えば両書の共通部分から成っていた祖本を想定し、この祖本から両書が独自の成長を遂げたとの仮説も、一応は成立しよう」としている。

（13）片桐〔研究篇〕によれば、「家隆の説」とは「続群書類従本知顕集、あるいは北野天満宮本知顕集などの説を指す。」（六六五頁）

（14）狩使の本とは、現行本の第六十九段を初段に置くものを言う。これに対して、現行本のように「昔男初冠して」で始まる段を初段に置くものを初冠の本と言う。

（15）なお、「又庫」は書陵部所蔵資料『伊勢物語抄（冷泉家）』の公開画像（http://base1.nijl.ac.jp/iview/Frame.jsp?DB_ ID=G0003917 KTM&C_CODE=0020-57601&IMG_SIZE=&IMG_NO=7）を見ると「文車」と読める。「車」は「庫」を写し誤ったものと思われるから、正しくは「文庫」であろう。

（16）片桐〔研究篇〕三六七頁に「定家が真向うから否定したために、その後かかる形態の本は全く伝わることなく」とある。

（17）島原文庫本巻上の該当箇所は以下の通り。（片桐〔資料篇〕二〇九～二一一頁）

ありはらのちうじやうなりひらのあそん、みづからいろをこのみてふるまいたりしことをむねとしてかきおきたりしものがたりなり。

［中略］まづ、なりひらはおほくつまをもちたりし中に、げんけいぐわんねん十月のころよりして、やまとのかみふぢはらつぎかげといふものゝむすめ、いせといひしをんなを、つまとさだめてはんべりき。そのとし、おとこ五十二さい、をんな二十五さいなり。そのあいだに、このものがたりをせいしよして、よにとりいださんとするに、おほくときのきさきたちの御ことよりはじめて、人のため、わがみのため、いたましかりぬべきことのみありければ、これにはゞかりて、さうなくとりもいださず。さるほどに、おなじく四ねん二月に、なりひら、さいしよ、いせにかたりけるは、われかゝる物がたりをつくりたる、人のため身のためよくなきことなれども、たちまちにひろうせず。らうせうふぢやうのならひにて、みまかりはんべることあらば、のちの人のつくりかきたるやうにて、これをよにとりいだし、ひろうすべし、といひおきて、おなじく五月に身まかりぬ。そのとき、いせ、なくくあとのわざしてありふるほどに、ていじのみかど、これを御らんじて、おぼしめしける。御めぐみふかくてこういになりぬ。このいせは、もとより七でうのきさきにつかへりければ、こなたかなたにつけてひまなくして、なりひらがゆいごんをわすれにけるが、おもひいだして、このものがたりをとりいだして、よにひろうしてけり。そのゝち、くわんぺい四ねん五月は、なりひらがわざのはてなりければ、さとにいでゝとぶらはんとていでにけり。さて、なりひらが、そのかみ、かきおきたるものどもを、またみるに、ある物のそこに、いせ物がたりとかきたるものあり。これ、いまのうゐかぶりのほんなり。そのとき思ひけるは、わがれそのさきにとりいだして、せけんにひろめたりしは、あらざるほかの物なりけりとて、また、これ、きよくかきて、よにひろうせんとするに、いせがことのみおほくかきいれたりければ、わがみ、たうじ、みかどのかういなり。されば、あしかりな

んとおもひて、わがみのことをかきたるところをばぬきかえて、それにすこしにたるものがたりをかきかへ〳〵したりしなり。されば、ぬきかへたりしいせがふでのうちにして、せり川のぎやうかうはあるなり。それのみならず、じだいさがりたる物がたりはみないせがのちにかきたるふでのうちなるべし。

(18) 『和歌知顕集』と冷泉家流古注とで、伊勢による改変の時期と対象、動機と内容が異なる。『和歌知顕集』によれば、伊勢が最初は未定稿を見つけて改変し、その後新たに決定稿を発見した時にも改変した。その動機は、業平の遺言によって業平の自著と知られないように改変したものである。かつ、業平の死後のことを書き加えてもいる。これに対して、冷泉家流古注によれば、伊勢が改変したのは中書の本を宇多院に献上した時であり、業平自筆の本の系統については伊勢が改変したとはしていない。また、その改変の動機は、自分の事が書いてあるのを恥ずかしく思って業平の意志とは無関係に改変したものであり、自分の事が書かれた十七段を万葉集の歌に差し替えたという。

(19) 『和歌知顕集』と冷泉家流古注とで、二つの系統の立て方は異なる。『和歌知顕集』は、伊勢が業平の死後最初に見つけた未定稿の系統が狩使の本であり、伊勢が後に見つけた決定稿の系統が初冠の本であるとする。これに対して、冷泉家流古注も諸本を未定稿の系統と決定稿の系統に大別しているが、未定稿の系統は伊勢が宇多院に献上した伊勢中書の本とそれから派生した具平親王の本・安倍の師安の本・賀茂の内侍の本であり、決定稿の系統は業平の子滋春が朱雀院に献上した業平自筆の本とそれから派生した高二位の尼の本・長能の本である。狩使の本は業平自筆の本から派生した長能の本のみであり、その他は伊勢中書の本も含め、すべて初冠の本であるとする。

(20) 香西精「井筒 ―作者と本説―」(『観世』一九六三年九月号／『能謡新考 世阿弥に照らす』檜書店 一九七二年十月十八日)に「『伊勢物語』は、当時、虚構の文学作品とは受け取られず、業平の自叙伝的歌道聖典としての扱いをうけており」とある。これはまだ冷泉家流古注の存在が知られるようになる以前に書かれたものであるから、専ら『和歌知顕集』に基づくものと思われる。

(21) このほかの『和歌知顕集』と冷泉家流古注の相違点に、『伊勢物語』という題名のついた経緯がある。『和歌知顕集』は、伊勢が発見した未定稿にも決定稿にも『伊勢物語』いう外題があったとする。つまり、業平自身がこの題名をつけたということである。これに対して、書陵部本『伊勢物語抄』には「業平自筆の本は外題をかゝず。」(片桐〔飼料篇〕二九〇頁)「業平死後に彼妻なりければ、伊勢、業平の草案したりしを中書して亭子の院に奉る。仍之作者に課て伊勢物語と名付る也」(同前二九一頁)とある。

(22) 田代慶一郎『夢幻能』朝日新聞社 一九九四年六月二十五日)一一三頁に「〈業平とは)故も縁りもあるべからず」という里女の言葉に対して、「もつとも仰せはさることなれども」などと一応うわべでは同調しながら」とある。

(23) 注(22)の田代書同頁に当該シテ詞を「人を食ったものだというほかはない。」(一一二頁)「業平の異名「昔男」を否定の根拠に持ち出した

りしているところが曲者で、そのためにここの応答には現実感が希薄になり奇妙な言葉遊びの気分が漂い出すのである。その結果、舞台全体が奇妙な遊興空間に浮遊し出したような趣が生じる。」（一一三頁）と評している。